

比較冷戦文学史に向けて  
——『持たざる者たちの文学史』書評会提題者、  
阿部小涼氏および新城郁夫氏への応答——

**Toward a Comparative History of “Cold War Literature”:  
A Reply to Comments by Kosuzu Abe and Ikuo Shinjo on  
*Literary History of the Destitute* (2021)**

吉田 裕  
YOSHIDA Yutaka

東京理科大学教養教育研究院  
Tokyo University of Science, Institute of Arts and Sciences

キーワード

群衆 冷戦 沖縄 比較 社会主義

Keywords

The crowds; The Cold War; Okinawa; Comparative literature; Socialism

*Quadrante*, No.24 (2022), pp.201–209.

目次

1. 阿部小涼さんへの応答
  - 1-1. 理論的な関心とその背景について
  - 1-2. 群衆とアイデンティティ、アイロニーについて
  - 1-3. 恥と主体化について
2. 新城郁夫さんへの応答
  - 2-1. 横にずれながら新川明と大江健三郎を読む
  - 2-2. 冷戦期の経験を比較すること——社会主義リアリズムの問題

阿部小涼さん、新城郁夫さん、目の覚めるような提題を、ありがとうございました。議題となっているのが自分の著書であることを忘れてしまうくらい、聞き入ってしまいました。そのくらい、独自の読みへと開いてくださったことに、まずは感謝いたします。

1. 阿部小涼さんへの応答

まずは阿部さんの提題に関しまして。おもに三つ、論点をあげていただきました。一つ目は、群衆をどのような存在として位置付けるかという、本書全体の核となる議論です。とくに、ガヤ

トリ・スピヴァクやマーク・サンダースを引用しながら、「はじめに」で提示されている箇所についてです。二つ目は、人種とジェンダーのグラデーションの困難をいかに読み解くかということについて。とりわけ、第3章のハイチ革命から第4章のバンドン会議をめぐる。三つ目は、情動に関する問いです。これは、とくに第4章のリチャード・ライト、第5章のジョージ・ラミングをめぐる議論で追求した主題です。以下、一つずつ、応答を試みます。

その前に、今回の議題となる著作『持たざる者たちの文学史』に加えて、これまで手がけた翻訳もあわせて紹介いただき、ありがとうございます。また、私と阿部さんの出会いに加えて、沖縄県高江での座り込みの現場で交わした会話を覚えてくださったことも、熱い思いに満たされるようです。マーク・サンダースの名前をそのとき出したことが、その後、自分の著書の一部になるとは想像してはいませんでした。とはいえ、「はじめに」のなかで述べている本書のコンセプトと関連する名前ですので、注目いただいたのはとても嬉しい指摘です。



## 1-1. 理論的な関心とその背景について

一つ目および二つ目の論点と関連するのですが、本書を執筆するにあたって、個人的に参考にしていた書き手が三名おります。一人目は先ほど名前が挙げたマーク・サンダースです。現在はニューヨーク大学で教えており、『共犯的であること——知識人とアパルトヘイト』<sup>1</sup>や『証言のあいまいさ——真実委員会の時代における法と文学』<sup>2</sup>などの著書があります。南アフリカにおけるアパルトヘイト言説の分析から、近年の真実和解委員会のドキュメントの批判的読解に至るまで、非常にスケールの大きい仕事を、文学研究と思想史、歴史学を架橋するようなかたちで行ってきた人です。もう一人は、やはり名前を上げていただいたブレント・ヘイズ・エドワーズです。『ディアスポラという実践——文学、翻訳、ブラック・インターナショナルリズムのはじまり』<sup>3</sup>という、パン・アフリカニズム研究においてすでに古典と言ってもよい著作を残しています。最後は、ジャクリーン・ローズです。『視界の領域におけるセクシュアリティ』<sup>4</sup>などがフェミニズムの理論的古典として読みつがれています。1970年代から1980年代に、スチュアート・ホールらと同時期にイギリスにフランスの現代思想を翻訳・導入し、とりわけラカン派精神分析とフェミニズムの接合をおこなったことで知られています。

ちなみに、ローズは、エドワード・W・サイードの『フロイトと非-ヨーロッパ人』（元はロンドンのフロイト・ミュージアムで行われた講演原

稿)のなかで、サイードの講演への応答をおこなっております<sup>5</sup>。近年は、みずからがユダヤ系であることも踏まえ、パレスチナ・イスラエル問題について積極的に発言し、著作も多くのこしております<sup>6</sup>。また、フェミニズムの立場から、なぜトランスジェンダーへの排除が起こるのかを批判的に論じた近著も重厚で読み応えがあります<sup>7</sup>。『持たざる者たちの文学史』のなかで、フロイトの集団心理論や後期の代表作「モーセと一神教」を議論の軸として参照していますが、ローズを読みながら、フロイトの著作を繰り返し読み込んでいったことが影響していると思われます。

以上、名前を挙げた三人は一見して共通点はまったくありません。ただ、あえて共通項を探るとすれば、いずれも専門用語(ジャーゴン)をあまり使わないということです。いわゆるポストコロニアル研究は(自分も片足以上突っ込んでいるわけですが)、専門用語がとても多い。そのため、議論自体がどうしても空中戦になりがちであることに加え、それ以外のディシプリンの人びとを拒絶しがちであるという難点があります。これは、自分が大学院生になりたての頃に気づいたことですので、なるべくそちらの方向性に行かないように心掛けていたことはあります。ですが、帝国主義の問題を、歴史に根ざした形で追求しようとする、ある程度の抽象性や思想の言葉は手放してはならないし、必要とされる。その際に、既存の言葉に依拠したり、どこかから持ってきた概念を当てはめたり

<sup>1</sup> Mark Sanders. *Complicities: The Intellectual and Apartheid*. Durham, NC: Duke University Press, 2002.

<sup>2</sup> Mark Sanders. *Ambiguities of Witnessing: Law and Literature in a Time of Truth Commission*. Stanford, CA: Stanford University Press, 2007.

<sup>3</sup> Brent Hayes Edwards. *The Practice of Diaspora: Literature, Translation, and the Rise of Black Internationalism*. Cambridge: Harvard University Press, 2003.

<sup>4</sup> Jacqueline Rose. *Sexuality in the Field of Vision*. London: Verso, 1986.

<sup>5</sup> ジャクリーン・ローズ「エドワード・サイードへの応答」エドワード・W・サイード『フロイトと非-ヨーロッパ人』長原豊訳、平凡社、2003年。

<sup>6</sup> Jacqueline Rose. *The Question of Zion*. Princeton, NJ: Princeton University Press, 2005; *The Last Resistance*. London: Verso, 2007; *Proust Among the Nations: From Dreyfus to the Middle East*. Chicago: The University of Chicago Press, 2011.

<sup>7</sup> Jacqueline Rose. *On Violence and Violence Against Women*. London: Faber & Faber, 2021.

するのではなく、論じる対象が要請するような思想を提示することができないか、と考えていた時期がありました。その際、上記の三人は、それぞれ、文学研究を足場としながらも、それぞれ阿部さんが引用されていたスピヴァクの言葉のように、「応答可能な最小限のアイデンティティ主義」としか言いようのないかたちで、それぞれにとっての必然的な問いと文体を紡ぎ出しているという意味で、模範とまでは言いませんが、ある種のモデルになっていたわけです。

## 1-2. 群衆とアイデンティティ、アイロニーについて

そこで一点目の問いに戻ります。とくに、群衆とアイロニー、そしてアイデンティティについてです。『持たざる者たちの文学史』出版後に、何人かの方々に読んでいただき直接に感想を聞く機会がありました。そのなかで、伝わりづらかったのかもしれないと反省したのが、この本の論点でもあるのですが、「群衆をなぜ肯定的なものとして読むのか」という点です。それこそ、「群衆は〇〇である」という叙述を本書の冒頭に行なっているわけです。ここでは、「一般的にはこのように思われているはずだ」と私が考えるところのイメージを羅列しています。「従順」である、「危険」である、場合によっては「コントロール不能」で「非理性的」であるため、「排除すべき存在」である、というように。しかし、そのような「群衆についてのイメージ」が、断片的かつ具体性を伴うものではないという点が問題だったかもしれません<sup>8</sup>。

もちろん、本書の各章では群衆や大衆、民衆といった集合的なイメージを、作家や思想家が帝国主義の時代から脱植民地期にいたるまでいかに作成してきたかということが、主要な作業です。しかし、現在の私たちの身の回りで想起しうる群衆といったとき、肯定的なイメージ

を抱きづらいという点は、確かにあるかもしれない。反G8運動など国際的な規模での街頭デモのみならず、東日本大震災以後に頻発した反原発デモ、あるいは2014年から2015年にかけての安保法制反対のデモなどを肯定的に思わない人もいる。そうでなくとも、それぞれの行為主体を群衆ではなく、「民衆」ととらえた場合、「群衆はもっと下劣なものだ」と考える人がいてもおかしくはない。たとえば、インターネット上の匿名の存在、イベントやなかで騒いでいる「うるさい連中」というように。このような日常と歴史のあいだを埋める作業については、確かに本書では詳細には行なっていないため、そのふたつの距離に介入する言葉は、もう少し必要だったかもしれないと考えます。もちろん、民衆やその他の肯定的なニュアンスで用いられる人びと一般を措定する場合、群衆や暴徒との切り分けがあるということ、そして、その切り分け作業のなかに植民地主義の歴史を読み解くということも、本書のもう一つの重要な論点ではあるのですが。

つぎにアイロニーとアイデンティティについての問いです。これは、二つ目の論点への答えでもあります。阿部さんに言及いただいた本書35頁から36頁のスピヴァク『ポストコロニアル理性批判』からの引用は、本書の元になる博士論文にはありませんでした。その後、ジョージ・ラミンの三作目の小説『成熟と無垢について』を論じる過程で、この言葉に引き寄せられたのでした。

『成熟と無垢について』（1958）は、独立直前のカリブ海地域の架空の島サン・クリストバルを舞台とする政治小説です。そこで脱植民地化を担うことになるのは、イギリスから帰国した植民地知識人たちで、独立派と反動派のあいだで翻弄されます。その政治ドラマが、異性

<sup>8</sup> より説得的なかたちの検証は、藤野裕子『民衆暴力——揆・暴動・虐殺』（中公新書、2020年）における豊富な具体例を参照のこと。

愛と非異性愛のあいだの理解可能性と並行するようにして進行するわけです。そのような意味でも、「人種とジェンダーのグラデーションの困難」をアレゴリー化した作品と言えます。作品の詳細な分析はかつて別箇所で行ったことがあるので、省略します<sup>9</sup>。ここでは、作品のエピグラフで引用されているジューナ・バーンズ『ナイトウッド』（1936）に注目したいと思います。バーンズは、詩人で批評家のT・S・エリオットに見出されたモダニズム期の重要な作家の一人で、『ナイトウッド』はレズビアニズムを主題とする小説です。ラミングは、『成熟と無垢について』のエピグラフに、この作品から以下の一節を引用します。「あまりにアイデンティティの感覚が大きいと、何も間違ふことのないような気分になる。そして、あまりに少なくとも同様である。」<sup>10</sup>

この言葉は、アイデンティティという言葉が含み持つ政治的な効果の、理論的に定式化しづらい部分をうまく言い当てています。一方では、アイデンティティ概念そのもののなかにある他者性ないし相互依存性と関わります。『成熟と無垢について』という作品の主要でないナラティブを構成するのが、自己から疎外された者たちによる実験的対話及びモノローグです。肌の色が白色「でない」ことによって自己から疎外された者、あるいは、異性愛主義「でない」ために自己から疎外された者。このような「でない」という否定性を媒介にして、たがいに会うことができるか、あるいは、出会いそこねてしまうのか。そもそも「出会う」ということはどういうことか。帰結の約束されない緊張関係が続く

わけです。他方で、このような自己疎外から無縁に見える者たちが担う政治の表舞台でも、かれらが無謬の存在「である」ことは、まったく自明ではない。宗主国に取り入る植民地エリートのみならず、宗主国で西洋式の教育を受けつつ、民衆の言葉をもたない植民地知識人たちも、ある意味で、歴史を動かす群衆を前に言葉を失います。アイデンティティの確らしさに充足する者たちは、古代ギリシャ劇のコロスのように、物語のわかりやすい進行に介入する群衆の存在によって、アイロニカルな形で足をすくわれる。

以上のように、『成熟と無垢について』では、セクシュアリティと人種に関するナラティブ、そして、脱植民地期の政治のナラティブが、互いに参照しあうようにしてジグザグに進行します。この小説でラミングが実験的なかたちで行っていることを、論文形式で行おうとしたときに、上記のようなスピヴァクの引用、そして、第3章や第4章で参照した、ブレント・エドワーズやジョーン・スコットが適切な導きとなったのでした。

ちなみに、ディスカッションの際に阿部さんが指摘なさったように、ボールドウィンがラミングにどうも好意らしきものを抱いているのではないか、という指摘がありました。とりわけ「黒き王者とその勢力たち」という、バンドン会議の翌年にパリで開催された第1回黒人作家芸術家会議についての報告のなかで、きわめてラミングのことを高く評価しています<sup>11</sup>。ラミング自身もやはり1960年に出版した批評集『故国喪失の喜び』のなかでボールドウィンのことに言

<sup>9</sup> 吉田裕「群衆、あるいは脱植民地化の不確かな形象——ジョージ・ラミング『成熟と無垢について』論」『多様体』1号、月曜社、2018年、129-143頁。

<sup>10</sup> George Lamming, *Of Age and Innocence*, London: Allison and Busby, 1981 [1958], p.5; Djuna Barnes, *Nightwood*. Preface by T. S. Eliot. New Introduction by Jeanette Winterson. London: Faber & Faber, 2007 [1936], p.122.〔ジューナ・バーンズ「夜の森」河本仲聖訳『集英社ギャラリー 世界の文学（4） イギリス3』集英社、1991年〕

<sup>11</sup> James Baldwin, “Princes and Powers.” *Nobody Knows My Name: More Notes of a Native Son*. New York: Penguin, 1991[1964], p.45.

及しています<sup>12</sup>。友愛と言わないまでも、非常に込み入った形で男同士の絆がここにあるのでは、とする批評もあります<sup>13</sup>。

### 1-3. 恥と主体化について

最後に三点目の恥と主体化の問いについてです。大江健三郎『沖縄ノート』については、すでに新城郁夫さんが『沖縄を聞く』のなかで精緻な読解をおこなっていらっしゃるの、そちらに譲ります<sup>14</sup>。ただ、阿部さんが言及されたような「このような日本人ではないところの日本人へと自分を変えることはできないか」というフレーズは、やはり恥という情動への言及とともに、『沖縄ノート』にて反復されます。これは、大江個人の問題にとどまらないものがある、と考えられます。わたしはかつて英文学研究をしていたこともあり、英文学者の中野好夫が沖縄の復帰運動に関わった際のきっかけやその帰結の一端を明らかにしようと、論文を書いたことがあります。その際、中野の場合は、対米運動としての復帰運動という構えを遂行するときに、帝国日本の臣民という意識が抜きさしがたく残存する、ということを論じました。やはりその時も恥への考察を議論の媒介としました<sup>15</sup>。

その際にも考えたのは、沖縄の反戦反基地運動を媒介にする際、なぜ日本の知識人は、日本人とは何かという反省的なジェスチャーに回帰し、その円環から抜け切らないのか、ということです。もちろん、反省の試み自体は非常に重要です。しかし、—以下は自己批判も含んでの話としてお聞きいただきたいのですが—サンフランシスコ条約第3条による沖縄の米軍統治とその継続、そして、天皇制の維持とセットに

なった憲法第9条の存在といった歴史的に重要なモメントを真にみずからの思想的課題として考えきれてないのではと思うのです。もちろん、歴史学や批判的な国際関係学、一部の文学研究など、これらのそれぞれの事象への粘り強い考察がすでに沖縄内外で積み重ねられてきている。にもかかわらず、現在の反基地運動をはじめとする抵抗運動への憧れのようなものに目が眩んで（あるいは、それ以外の理由があるのか）、沖縄の歴史を、とりわけ天皇制と骨がらみになった出来事としての集団自決の歴史を十分に学びきれていないのではないかと考えられるのです。ですから、仮に、自己に回帰するまではいいとしても、「民主主義の本当の姿がここにある」あるいは「日本はダメだから沖縄がんばってくれ」というような身も蓋もない言葉（やそれに近いもの）を見聞きしてしまうと、重要な問題を回避するために民主主義の理想化や沖縄への過度な期待を繰り返しているのでは、といった異和が積み重なるのだと思います。

では、どうすればいいのか。約束された答えはないのですが、沖縄の文学や歴史、思想を読み続ける、学び続ける以外にないのだとおもいます。わたし自身は、沖縄研究は専門ではないのですが、それでも、証言から学ぶ、現在と過去の作家、芸術家、学者から学び続けることをやめないということかもしれません。これでさえ、もたらされる成果について確たる結果が約束されるわけではないとは思いますが。

## 2. 新城郁夫さんへの応答

続けて新城さんの問いに応答したいと思い

<sup>12</sup> George Lamming, *The Pleasures of Exile*. London: Pluto, 2000 [1960].

<sup>13</sup> Nadia Ellis, *Territories of the Soul: Queered Belonging in the Black Diaspora*. Durham, NC: Duke University Press, 2015.

<sup>14</sup> 新城郁夫『沖縄を聞く』みすず書房、2010年、177–206頁。

<sup>15</sup> 吉田裕「中野好夫と沖縄——「道義的責任」と主体化の論理」『年報カルチュラル・スタディーズ』4号、2015年、245–262頁。

ます。阿部さんへの応答の最後に述べた情動と主体化、そしてバンドン以降のバンドン的なものという問いかけに関わる形で述べたいと思います。そして、最後に、『持たざる者たちの文学史』の「おわりに」の部分で、今後の展開として触れた比較冷戦文学史について構想の一端を述べたいと思います。

## 2-1. 横にずれながら新川明と大江健三郎を読む

提題のなかで言及された新川明「「非国民」の思想と論理」のような論考は、繰り返し読み返されるべきだと思いますし、読み返すきっかけを与えてくださった新城さんにあらためて感謝したいと思います。

今回読み返してみ気づいたのは、これも自分が第5章で行った議論にひきつけるかたちになってしまいますが、新川が「母なる祖国」の心情主義」という言い回しを用いつつ復帰運動批判をおこなっていること、そして、自らが「正しく読まれる」ことを強調している点です。具体的には、1960年に刊行された詩画集『おきなわ』所収の詩「日本が見える」が、北緯27度線の海上大会（1964年の第2回）のレポートにて引用されていたことに関して述べています。とくに、その詩のなかの「日本の貧しさ」や「ぼくらの叫びに／無頼の顔をそむけ」といった箇所が看過されていたことを、「わたしがこの詩に塗り込めたつもりの、屈折した心情を読み取ってもらえないことに苛立ちを覚えた」としています<sup>16</sup>。このような、日本への両義的な感情が捨象されて、「母を願い求める子」として沖縄が表象されることへの異和を述べたわけです。もちろん、新川自身によって、この論考自体がさまざまな方面に向けて明示的かつ暗示的な批判を織り込んでいるという点で、込み入った構

造を持ちます。そのため、上記の問題は些細な点と言いうるかもしれません。

ですが、復帰運動における「母なる祖国」への寄りかかりが天皇制の温存でしかなかったとすれば、新川にとって、母なるものの系譜の作成を批判的に読解することと、天皇制批判は切り離せないものとしてあるわけです。その際、新川は、内在的な批判として伊波普猷の日琉同族論を検討しながら、距離の喪失というモチーフに注目しています。

そこで伊波が、日本同化に知的努力を投入すればするほど、同化のために否定されなければならない、とみずから主張する事大主義の思想と論理を、さらに強化してみずから体現することにしかならないという宿命的な自己矛盾を深めていくことにしかなかった。（略）まさにこのことによって伊波は、みずからの内部世界に抱える自己矛盾（「悲哀にみちた二重意識」）を、克服すべき対象として自覚的に悩むことなしに、ただひたすら日本同化のためにその知的エネルギーを投入することができたし、そのことによって日本国家権力の側が上から強要する皇民化政策に対応して、沖縄内部から、しかもその知的側面から積極的に皇民化を補強する役割を担いつづけたといえるのである<sup>17</sup>。

沖縄から日本へという方向性の極限化が距離の喪失を生んだとすれば、そこにあり得たはずの距離の残滓を見出す。新川が自身を読みつつ読解の範例を示しながら、伊波普猷に代表される沖縄近代の思想と文学の挫折や屈折を批判的に読解し、さらに、同時代の状況を平

<sup>16</sup> 新川明『反国家の兇区』現代評論社、1971年、75頁。「「非国民」の思想と論理」をはじめとする新川明の反復帰・反国家論の「危うさ」と「可能性」についての精緻な読解は、徳田匡「「反復帰・反国家」の思想を読みなおす」『反復帰と反国家——「お国は？」』藤澤健一編、社会評論社、2008年、187-224頁を参照のこと。

<sup>17</sup> 新川明『反国家の兇区』112-113頁。

行して分析する。これらがいずれも切り離せない形でなされているところにこの論考の難解さがあるのですが、最後の点は今でもとてもアクチュアルなものとして読むことができます。全軍労のストライキがいかにして現状維持としての革新政党の言説、すなわち、統治の安定の方向性へと吸収されていったか、いわゆる「前衛党」の言説がいかにか欺瞞的であるか（天皇制を問うことのない「平和憲法下の日本」といったサンフランシスコ体制に、いかに安住しているか）、といった分析です<sup>18</sup>。これは、沖縄での反戦反基地運動が、復帰運動の名のもとに、保革かかわらず、「本土」の政党に系列化されることで変革的な勢いを失ってしまうという隘路をどう考えるか、ということでもあるわけです。

いずれにも共通するのは、非常に複雑な私たちで天皇制批判を行っているということです。その気の遠くなるような作業の根拠となるのが、新川自身、誤解を産みかねないと危惧しつつも強調する差異、つまり、「日本相対化のために、日本と沖縄の異質性＝「異族」性を強調すること」と、琉球王国の再現を夢見る「琉球ナショナリズム」との違いであるわけです<sup>19</sup>。

一見すると、大江の脱日本人願望の反復と、新川の言うところの、沖縄が日本に対して持つ異質性＝「異族」性の反復的な強調は、平行であるようにも読めなくはありません。つまり、本来ならば異なっていたかもしれないはずのものとして、自己同一性のなかに執拗に亀裂を見出そうとしているという点において<sup>20</sup>。たとえば、大江の場合、新城さんがかつて論じたように、船上で出会った沖縄の子供と戯れる米兵、そして、その姿に嫉妬する語り手＝大江という三角形のホモソーシャルかつホモエロティックな関係性を見出すことで、大江の主体

化の契機をずらそうとしていたことを思い出してもいいかもしれません<sup>21</sup>。今回の新川についてのお話もやはり横軸の関係性への注視であるということから、『沖縄を聞く』のなかの『沖縄ノート』読解のさらなる発展と言いうるのかもしれない。

距離の喪失を内在批判として分析し、距離を見出すというかたちでの言論の作り方の一つの典型が新川にある。そうであるならば、新城さんの考えておられるところの、「語られない／書かれないままそこに現われて消されていこうとする「妻」という言葉の始まりというものを通じてしか沖縄語を語ることはない」という新川の作業は、横にいる「妻」に向かって言葉の練習をすることで、縦ではなく横にずれる形で距離を作り出している。すなわち、日本を相対化する際の根拠のようなものが、縦軸ではなく「横にずれている」、水平軸をめざすものになっているという指摘は、とても多くの示唆を含んでいるように思えます。それが、母性的なものを実体的なものとしてつくることの不可能性を示している。

同時に、やはり新城さんの引用されていた、1956年の詩『有色人種(抄)』の言葉のなかにある「かなしい兄弟たち」「キミたち」という連帯のよびかけも、同様です。水平軸の方向をめざすのみならず、その内実が固定されないものでしか、内部の複数性を前提としたものとしてしかありえないかたちでの呼びかけになっている。それが、新川にあらがいつつ新川を読むということかもしれません。

## 2-2. 冷戦期の経験を比較すること——社会主義リアリズムの問題

池宮城積宝『奥間巡査』の読解につきまして

<sup>18</sup> 新川明『反国家の兇区』82-90頁。

<sup>19</sup> 新川明『反国家の兇区』133頁。

<sup>20</sup> 新川明『反国家の兇区』78頁。

<sup>21</sup> 大江健三郎『沖縄ノート』岩波新書、1970年、22-24頁；新城郁夫『沖縄を聞く』みすず書房、2010年、187-194頁。

は、沖縄が近代へと引きずり込まれるなかで出てきてしまう、解消しようのない歪みについて焦点を当てておられました。とくに、その歪みが、内側に折りかえされる警察的なものとして巡査の身体に表れているということ、とても刺激的なかたちで提示されていて、ぜひこの分析をもっと読みたいと思いました。明治期から大正期にかけての沖縄近代の歴史や文学については、沖縄戦や戦後沖縄について知らない以上に何も知らないものですから、「これからちゃんと勉強するように」という叱咤激励をいただいたものと思っています。

関連することを一点だけ。『奥間巡査』がプロレタリア文学の雑誌に発表されたということの意味をどう考えるか、また、同作品に関連して述べられた、1920年代から1930年代に、キューバやペルーへと移動する沖縄の人びと、とりわけ阿波根昌鴻、山入端つる、あるいはロサンゼルスに身を置きながら社会主義運動とかかわった人びとを大きな流れのなかに位置づけたときに、どのような世界史が立ち上がってくるか、ということです。

その際に連想したのが、社会主義リアリズムとその影響についてです。1920年代から1930年代は、アメリカ合衆国の作家たちが社会主義リアリズムに真剣に取り組んでいた時代でもあり、それは国際共産主義運動の盛り上がりと切り離せないものでもあります。ジョン・スタインベックやセオドア・ドライサー、アップトン・シンクレア、ジョン・ドス・パソスなどが知られています。すべての作家や作品をひとくくりにはできないのですが、いずれもジャーナリストティックでありながら、ときにはモンタージュを思わせる映画的な手法を用いて——ドス・パソスの『U・S・A』がいい例です——、資本と労働の軋轢を、農民や工場労働者の立場から見

た民衆的な物語として提示したのです。

視点をカリブ海地域に転じますと、1941年の大西洋憲章では、イギリス軍にアメリカが戦闘機を供与する代わりに、ジャマイカやトリニダード、アンティグアなどに海軍基地の建設を許可することが決められました。当時、枢軸国側の日本が日中戦争の継続を決定したことによって連合国側の軍事的連携が強化されたのでした。1942年からはトリニダードのチャグアラマスにて基地建設が本格化します。これ以後、米軍の存在が地域コミュニティを分断することになります。1950年代後半からは、のちの首相となる歴史家のエリック・ウィリアムズを中心に反基地運動が盛り上がるのですが、それまでは、イギリスとアメリカの協働のもとでの支配を甘んじて受け入れざるを得なかったわけです。米軍が大西洋地域でイギリスの支配を引き継ぐように、第二次世界大戦後の太平洋地域では、朝鮮半島での反共主義の固定化を通じて、日本の支配地域を引き継いでゆくわけです。イギリスと日本は、酒井直樹が言うところの、アメリカ合衆国の「二つの下請け帝国」となります<sup>22</sup>。

当時、英植民地でもあったトリニダード社会における米軍支配の影響を社会主義リアリズムの形式で描いた小説に、『ラムとコカ・コーラ』(1956)があります<sup>23</sup>。米兵向けの酒場で演じられることで生まれた音楽ジャンルであるカリプソのヒット曲で同名のものがありますが、それとかけているわけです。作者は、高校時代にC・L・R・ジェームズの教えを受けた、ラルフ・ド・ボワジエという人です(ジェームズは1932年にイギリスに渡るまで、現地の名門高校であるクイーンズ・ロイヤル・カレッジの教師をしていました)。トリニダード社会が米軍の存在によって分断されてゆくさまを悲劇として描いた

<sup>22</sup> 酒井直樹「スチュアート・ホール氏を惜しむ」『思想』1081号、2014年、53頁。

<sup>23</sup> Ralph de Boissière. *Rum and Coca-Cola*. London: Allison & Busby, 1984 [1956].

作品で、あきらかに社会主義リアリズムの手法が用いられています。

また、関連する話として、1950年代前半にイギリスのオックスフォード大学で英文学を学んでいたスチュアート・ホールは、当時、ドライサーなどの社会主義リアリズムの研究を志していました。ただ、それも指導教員に止められてあきらめざるをえなかったようです<sup>24</sup>。1950年代後半頃のカリブ海地域では、のちに知られるカルチュラル・スタディーズの実践者ではなく、イギリスに拠点を置くジャマイカの文芸批評家として知られていました。実際、カリブ海地域で発行されていた雑誌に、当該地域の文学についての評論をいくつか残しています。なお、ボワジエは1907年生まれ、上記の小説を出版した頃には、政治活動のために職を失いオーストラリアへ移住しています。ホールは後続の世代で、ジャマイカの首都キングストンにて、1932年に生まれました。それぞれ脱植民地化の動きにどのように応答しようとしたのか、その歴史的経験や置かれた立場もまったく異なるわけです。

とはいえ、1950年代前半から半ばにかけて、バンドンと同時代にバンドンの場にいることができなかつた人びとが、バンドン的なものをいかに体現しようとしていたのか。そのようなさまざまな立場や年代の人びとが、帝国支配から離脱する際に、時代の呼びかけに呼応するようにして筆をとったとき、社会主義リアリズムがどのような賭け金としてあったのかをふりかえることが、これまでの自分の研究には不足していたことを反省します。もちろん、合衆国での作家たちのありようをそのまま実践するのではなく、みずからの文脈へと置き換え、歴史的・政治的な局面と向き合いながら言葉を発明していったのでした。ここで、「横にずれていく

新川明」は一つの重要な参照項になるはずでず。また、冷戦のあり方が、沖縄をはじめとする東アジア、そして、カリブ海地域を軸とする大西洋地域で、重なりながらずれてゆく。そのずれの核心には、天皇制の異様さがあるのではないかということが、これまで両者の比較検討を少しずつですが試みつつ考えているひとつの仮説です。

これらの問いを突き詰めるには、通常、冷戦期のはじまりとされる1940年代後半よりさかのぼって、歴史的経験を検証するということが求められているはずでず。その最たるものが、植民地支配を諸帝国がいかに互いに参照しあい、統治のネットワークをつくりあげたかについての慎重な検討である、とひとまずは言うことができるかもしれませんが、言いっぱなしにならないように、一つずつ、取り組んでいきたいと考えております。どうもありがとうございました。

<sup>24</sup> スチュアート・ホール、ビル・シュワルツ『親密なるよそ者——スチュアート・ホール回想録』吉田裕訳、人文書院、2021年、353-354頁。